第五章　大君の物語　匂宮たちの紅葉狩り

［第一段　十月朔日頃、匂宮、宇治に紅葉狩り］

*十月朔日ころ(十月上旬の初冬に)、網代もをかしきほどならむと(宇治川の網代漁が面白い頃だろうと)、そそのかしきこえたまひて(薫君は匂宮をお誘い申しなさって)、紅葉御覧ずべく申したまふ(紅葉見物をご提案申しなさいます)。　*「じふぐわちついたちころ」は注に＜神無月の上旬頃。初冬の季節。＞とある。

親しき宮人ども(側近従者や)、殿上人の睦ましく*思す限り(殿上役人の親しくなさっている者が皆)、「いと忍びて(ごく内輪で出かけよう)」と思せど(と匂宮はお思いだが)、所狭き御勢なれば(本来が大所帯の御威勢にして)、おのづからこと広ごりて(中納言が今や宇治行を隠し立てしないので、自然に話が広まって)、左の大殿の*宰相中将参りたまふ(左大臣の源大殿の御子息の参議兼近衛中将が源家の宇治別荘の接待役として参上なさり)、さては、この中納言殿ばかりぞ(その他には、この中納言殿だけが)、上達部は仕うまつりたまふ(高官では御供仕りなさいますが)、ただ人は多かり(平役人は付き従う者が多くいました)。　*「思す限り」は「ただ人は多かり」に掛かる。その間に挿まれた文は挿入句となる構文だが、その挿入部分が文意としては主であり、すっきり整理されていない書き方のようにも見えるが、その混雑感が一行の賑わいを思わせる演出になっているとも思える。　*「さいしゃうのちゅうじゃう」は注に＜「竹河」巻（第一章三段）に登場した蔵人少将、現在宰相（参議）兼中将。＞とある。竹河巻五章四段には、この人の年齢明示が「二十七、八のほどの、いと盛りに匂ひ、はなやかなる容貌したまへり」とあり、それが去年の秋のことと思われるので、この時点では 29 歳あたりだ。また、この「参りたまふ」は＜奉仕なさる＞で、今回の宇治行も昨年の二月と同様に源家の別荘である宇治対岸の所領を休憩地に提供するのだろうから、源中将は接待役として奉仕する役目を負った、ということだろう。

かしこには(宇治姫の山荘には)、「論なく(間違いなく其方で)、中宿りしたまはむを(宮様はご休憩なさるので)、さるべきさまに思せ(そのように準備して下さい)。さきの春も、花見に尋ね参り来しこれかれ(去年の春も桜の花見に参上申した誰とも分からぬ大勢が)、かかるたよりにことよせて(こうした機会を楽しみにして)、時雨の紛れに見たてまつり表すやうもぞはべる(時雨のように不意にどっと一気に押し寄せ申すかもしれません)」など、こまやかに聞こえたまへり(などと薫中納言は事細かくお手紙でお知らせ申しなさいました)。

御簾掛け替へ、ここかしこかき払ひ、岩隠れに積もれる紅葉の朽葉すこしはるけ、遣水の水草払はせなどぞしたまふ(そして中納言は、宇治山荘の御簾を掛け替え、あちらこちら掃除をし、岩蔭に積もっている紅葉の朽葉を少し取り除き、遣水の水草を払わせたりなさいます)。よしあるくだもの、肴など、さるべき人などもたてまつれたまへり(風流な果物や、肴など、という接待準備に手伝いに必要な者たちを差し向け申し上げなさいました)。

かつはゆかしげなけれど(そのように中納言が差し出がましく都風に整えたのでは、一方では山里の風情を欠くけれども)、「いかがはせむ(仕方がない)。これもさるべきにこそは(これも妹君を皇子の妃に相応しく飾り立てる為だ)」と思ひ許して(と目を瞑って)、心まうけしたまへり(匂宮を迎える支度をなさったのです)。

舟にて上り下り、おもしろく遊びたまふも聞こゆ(匂宮ご一行が紅葉見物で宇治川を舟で上り下りしては、賑やかに管弦を演奏なさっているのが山荘にも聞こえます)。ほのぼのありさま見ゆるを、そなたに立ち出でて、若き人びと見たてまつる(遠くに見えるその光景を川に面した庭先の縁側に立ち出て若い女房たちが拝見申します)。*正身の御ありさまは(肝心の匂宮御本人の御姿は)、それと見わかねども(其れと見分けが付かないが)、紅葉を葺きたる舟の飾りの(紅葉が屋根を葺いたように船に降り積もった飾りが)、錦と見ゆるに(錦の織物のように見事に見える中に)、声々吹き出づる物の音ども(近衛の貴公子たちが吹く笛の音が)、風につけておどろおどろしきまでおぼゆ(風に乗って大きく響いて驚くほどです)。　*「さうじみ」は注に＜匂宮の姿をいう。＞とある。男にこの語が使われたのは初めてなので少し意外だった。御本人、ではあるのだろうが、匂宮のことを言うなら「宮の」でも良いだろうし、「御ありさま」だけでも良さそうなので、この「正身の」は＜肝心の＞という語感かと思う。もう少し言えば、自覚していない＜肝心の本人＞みたいな語感だ。

世人のなびきかしづきたてまつるさま(都人が兵部卿宮に付き従って厚くお仕え申す様子が)、かく忍びたまへる道にも(このような私的な行楽にも)、いとことにいつくしきを見たまふにも(とても格別に荘厳なのを御覧になるにつけても)、「げに、七夕ばかりにても(本当に七夕のように年に一度のことであっても)、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ(このような男君の御威光を待ち望みたいものだ)」とおぼえたり(と宇治姫たちは思いました)。

文作らせたまふべき心まうけに(匂宮に漢詩を作らせなさるのも面白かろうという御心算がおありで)、博士などもさぶらひけり(文章博士なども同行して源家別荘に来ていました)。たそかれ時に御舟さし寄せて遊びつつ文作りたまふ(黄昏時には匂宮は舟を別荘に寄せ付けて管弦遊びをなさりながら漢詩をお作りになります)。

紅葉を薄く濃くかざして(紅葉の木々を夕日に薄く濃くかざし見て)、「*海仙楽」といふものを吹きて、*おのおの心ゆきたるけしきなるに(蔵人楽士たちが海仙楽という曲を吹くと、文士たちは各自で詩作にふける様子で)、宮は、*近江の海の心地して(匂宮は海仙楽に因んだ淡水湖の琵琶湖では海草のミルメが生えないので、姫に会い見る目が無い物足りなさに)、*遠方人の恨みいかにとのみ(宇治姫の嘆きは如何にとばかり思い遣られて)、御心そらなり(上の空なのだが)、時につけたる題出だして(時節を得た題を出し合って)、うそぶき誦じあへり(朗唱し合っていました)。　*「海仙楽(かいせんらく)」は＜雅楽の一。黄鐘(おうしき)調で船楽として作られた。海青楽(かいせいらく)。＞と大辞林にある。「海青楽」はユー・チューブに竜笛独奏のアップ・ファイルがあり、他の黄鐘調のファイルなども参考になった。なお、「吹く」の主語は楽士たちなのだろう。　*「おのおの」は詩作を練る文士たちで、「うそぶき誦じあへり」に結ぶ構文なのだろう。　*「あふみのうみのここち」は注に＜『源氏釈』は「いかなれば近江の海のかかりてふ人を見る目の絶えて生ひねば」（出典未詳）を指摘。淡水では「みるめ」（海草）が生えない。「見る目」の懸詞。中君に逢えない嘆き。＞とある。淡水＝池の水、ということだろうか。前振りの「海仙楽」が「雅楽的音楽研究書」サイトなどに＜仁明天皇が神泉苑に行幸のとき、楽人が船楽にて演奏していたのですが、その際、池の中島を、竜頭鷁首の舟で一周する間に一曲作るようにと天皇が仰せになりました。ちょうど舟に乗り合わせていた大戸清上が笛のパートを、尿麿（はりまろ）が篳篥のパートを作曲して天皇に奉った＞という専門書引用の作曲逸話が紹介されていて、其を踏まえた「近江の海」のようだ。とすれば、是は如何にも当時の知識人読者の教養を前提にした洒落語用らしく、この注無しには私には全くの意味不明な言い回しだ。　*「遠方人(をちかたびと)」は注に＜『花鳥余情』は「七夕の天の戸わたる今宵さへ遠方のつれなかるらむ」（後撰集秋上、二三八、読人しらず）を指

摘。中君が恨めしく思っているだろうことを、匂宮は思いやる。＞とある。「げに、七夕ばかりにても、かかる彦星の光をこそ待ち出でめ」を受けた洒落語用ということで、実に凝っている、というか私のような通りすがりには、上滑り気味の饒舌さに見える。

人の迷ひすこししづめておはせむと、中納言も思して（人びとの賑わいが少し鎮まってから宇治姫の許に出向きなさろうと中納言も考えて）、さるべきやうに聞こえたまふほどに（そのように匂宮にも申し上げなさっていた時に）、内裏より、中宮の仰せ言にて（御所から中宮の御言い付けにより）、宰相の*御兄の衛門督（源宰相中将の御兄君の衛門督が）、ことことしき*随身ひき連れて（物々しい出で立ちの護衛官を従えて）、うるはしきさまして参りたまへり（正使としての威厳を持ってお迎えに参上なさいました）。　*「御兄」はローマ字読みに「おおんあに」とある。「兄」は「せうと」だろうと思い込んでいたので意外だった。この「ゑもんのかみ」は＜夕霧の長男。＞と注にある。去年の二月の長谷寺詣でには、まだそれぞれが秋の昇進前の事ではあるが椎本巻一章一段に「御子の君たち、右大弁、侍従の宰相、権中将、頭少将、蔵人兵衛佐など、さぶらひたまふ」と源殿の子息たちが丁寧に説明されていた。また、夕霧巻の巻末に「この御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は、大君、三の君、六の君、次郎君、四郎君とぞおはしける。すべて十二人」と順序立てて説明があった。が、是等の記事を見比べても、私には長男が衛門督で三男が宰相中将であるとは判断できない。ただ、否定する根拠も無いので、一応はそのように見て置こうとは思う。ところで、若菜下巻三章三段に朱雀院五十賀に向けて「大将の御子、典侍の腹の加へて三人、まだ小さき七つより上のは、皆殿上せさせたまふ」と、長男、次男、三男、の三人を源殿が（というより光君が孫をだが）舞楽修行させた記事があって、その当時の源殿は 25 歳なので、三男が 7 歳だったとすると年子だとしても長男が 9 歳で次男が 8 歳だったことになる。が、18 歳で三条殿と正式に結ばれた筈の源殿であってみれば、三男が正妻腹で、長男と次男は典侍腹でなければ変なような気がする。そして現在は、その 25 年後の源殿 50 歳の時の話だとするなら、三男は 32 歳の筈だ。ところが、恐らくは去年の秋のことかと思うが、竹河巻五章四段に「左の大殿の宰相中将（‥中略‥）二十七、八のほどの、いと盛りに匂ひ、はなやかなる容貌したまへり」という記事があって、この「宰相中将」が三男だとすると、若菜下巻の記事とは整合しないが、却って全体の年回りは無理が無いようにも見えて来る。どうにも落着きが悪く腑に落ちないが、今はこれ以上は詰めようも無い。　*「随身」は近衛府舎人の要人護衛官で衛門督には四人従うらしいが、「ことことし」は＜物々しい＞だから、行楽と知った上で敢えて帯刀正装を崩さずになのか、勅使として増員してなのか、とにかく場に不相応な堅苦しさでの登場らしい。衛門督は中宮の命によって、強制的に匂宮を京へ連れ戻しに来たのだろう。

かうやうの御ありきは（こうした御外出は）、忍びたまふとすれど（内々にこじんまりと為さろうとしても）、おのづからこと広ごりて（皇子であってみれば自然に大事になって）、後の例にもなるわざなるを（後の語り草にもなろうというものを）、重々しき人数あまたもなくて（警護の人数も少なく）、にはかにおはしましにけるを（急にお出掛けなさったのを）、聞こしめしおどろきて（中宮がお聞きになって驚いて）、殿上人あまた具して参りたるに（高官を大勢従えて衛門督が参上したので）、はしたなくなりぬ（きまりの悪い事になってしまいました）。

宮も中納言も（三の宮も中納言も）、苦しと思して（中宮の御心配に恐縮なさって）、物の興もなくなりぬ（興醒めしてしまいました）。*御心のうちをば知らず（同行者たちは匂宮の御心を知らずに）、酔ひ乱れ遊び明かしつ（酔い乱れ管弦と詩文に興じて夜を明かしました）。　*「みこころのうちをばしらず」は、従者たちが匂宮の宇治行が宇治姫目当てだということを知らないのではなくて、宮が宇治行を中宮に咎められて苦しんでいることを知らない、ということなのだろう。薫君の計算では、例えば光君が北山の紫君

を囲ったように、御し易い若侍を味方につけて匂宮が宇治姫を囲えるような方途を画策しようとしたのかも知れない。しかし、光君は王族から源氏に臣籍降下した独立した立場だったし、実際に二条院で独立した暮らしを営んでいたし、その二条院にしてからが、本来は臣下に封ぜられた身分なのだから二条殿の筈なのであり、母方の後見家が無かった事が却って桐壺帝の溺愛を受けることとなり、皇太子でもないのに御所育ちと成り、成人後は表向きの立場は二条殿の独立家ながら、実質で帝の庇護を受ける院として振舞うという特権地位にあったのであり、そうした特別な事情があってこそ、実勢の無い家系の姫と家を構えられたのであって、今でこそ王族領となって正式に院となった二条院だが、匂宮は堅苦しい王家身分のままであり、実際に親掛かりであり、とても光君のような自由が許される事情ではないだろう。

［第二段　一行、和歌を唱和する］

*今日は、かくてと思すに（翌日に匂宮は今日こそは予定通りに宇治姫を訪ねようとお思いになるが）、また（さらにまた）、*宮の大夫（中宮職長官や）、さらぬ殿上人など（それ以下の上級役人などを）、あまた*たてまつりたまへり（中宮は大勢お迎えに差し向け申しなさいました）。　*「けふ」とは、「明かしつ」を受けているのだから＜翌日＞なのだろう。「かくて」は＜かくありて＝予定通りに（宇治姫を訪ねる）＞かと思う。　*「宮の大夫（みやのだいぶ）」は＜中宮職（ちゅうぐうしき、中宮の公式政務機関）の長官（カミ）。従四位下相当。＞とのこと。　*「たてまつりたまへり」の主語は中宮で、「たてまつる」は＜お迎えを差し向け申し上げる＞のだろう。

心あわたたしく口惜しくて、帰りたまはむ*そらなし（匂宮は宇治姫に会えないままで落ち着かないし残念で、お帰りになる心算はありません）。かしこには御文をぞたてまつれたまふ（山荘には御手紙を差し上げなさいます）。をかしやかなることもなく（風流めいた楽しげな文面ではなく）、いとまめだちて（ごく実直に）、思しけることどもを（心から姫を思っているが容易に会えないということを）、こまごまと書き続けたまへれど（こまごまと書き続けなさったが）、「人目しげく騒がしからむに（人目が多くご迷惑そうなので）」とて、御返りなし（ということで姫からのお返事はありません）。　*「そらなし」は＜気持ちが無い＞ではありそうだが、意思と言うよりは＜気配が無い←素振りを見せない＞みたいな語感かと思う。

「数ならぬありさまにては（取るに足らない自分が）、めでたき御あたりに交じらはむ（大変な御威勢の兵部卿宮の交わりに加わろうなどとは）、かひなきわざかな（まるで不釣合だ）」と（と宇治姫は）、いとど思し知りたまふ（対岸の源家別荘の賑わいを見て、ますます分不相応を思い知りなさいます）。

よそにて隔たる月日は（遠く離れている月日は）、おぼつかなさもことわりに（会えないのも当然で）、さりともなど慰めたまふを（仕方が無いと納得も出来るが）、近きほどにののしりおはして（近くまで来て派手な様子をお見せになって）、つれなく過ぎたまひなむ（会わずに通り過ぎなさるのは）、つらくも口惜しくも思ひ乱れたまふ（辛くも悔しくも思い乱れなさいます）。

宮は（匂宮は宇治姫からの御返書が無い事に）、まして、いぶせくわりなしと思すこと、限りなし（ますます暗い気分で遣る瀬無くお思いになる事この上ありません）。*網代の氷魚も心寄せたてまつりて（網代の氷魚も匂宮に同情申してか寄り集まって）、いろいろの木の葉にかきまぜもて

あそぶを(紅葉を添えて盛り付けてあるのを)、下人などはいとをかしきことに思へれば(従者たちは大変なご馳走に思えて)、人に従ひつつ、心ゆく御ありきに(人それぞれに満喫しているようなこの御行楽に)、　*「網代の氷魚も心寄せたてまつりて」は「氷魚」が主語の擬人法と注にある。尤も、この「氷魚」は海を目指して川を下る、それなりに自己制御が可能な状態なのではなく、「網代の氷魚(仕掛け網に掛かった鮎の稚魚)」なので、食膳に盛り付けられているさまを示しているらしい。

みづからの御心地は(御自身のご心境は)、胸のみつとふたがりて(胸は塞がるばかりで)、*空をのみ眺めたまふに(行くに行けずにただ見るだけの近くて遠い対岸を眺めなされば)、この古宮の梢は(故宮邸の庭木の枝ぶりは)、いとことにおもしろく(それはとても風情があって)、*常磐木にはひ混じれる*蔦の色なども(椎の古木に巻きつく蔦の紅葉なども)、もの深げに見えて(深い味わいで)、遠目さへすごげなるを(遠目でさえ山里の厳しさを物語るのを)、中納言の君も(中納言の薫君も)、「なかなか頼めきこえけるを(なまじ迎えの準備を頼み申した事が)、憂はしきわざかな(悲しませる事になってしまった)」とおぼゆ(と思われます)。　*「空をのみ」は＜(実際には行けないので)ただ見るだけの＞という言い方なのだろう。　*「ときはぎ」は＜常緑樹＞という言い方らしいが、此処では椎の木と見做したい。　*「つた」の蔓は細い印象があるが、「あおやま風土記」ブログに「椎の古木」写真の掲載ページがあって、その椎幹を這う蔦は直径 20cm ほどと記されている。「色」は蔦の葉の紅葉なのだろう。

去年の春(こぞのはる)、御供なりし君たちは(御供した貴公子たちは)、花の色を思ひ出でて(桜の風情を思い出して)、後れてここに眺めたまふらむ心細さを言ふ(宇治姫たちが父宮に先立たれてこの山里にわび住まいなさる心細さを言います)。かく忍び忍びに通ひたまふと、ほの聞きたるもあるべし(匂宮がこのように内密にお通いなさっていることをそれとなく聞いている者も居るようです)。心知らぬも混じりて(事情を知らぬ者も混じって)、おほかたにとやかくやと(全体に何かと話題に上り)、*人の御上は(宇治姫の噂は)、かかる山隠れなれど、おのづから聞こゆるものなれば(こうした山里に隠れた暮らしながらも自然に知れるものなので)、　*「ひとのおおんうへ」は＜宇治姫の事柄＞で、匂宮と結ばれたという事情ではなく、八宮の御子としての人柄らしい。

「いとをかしげにこそものしたまふなれ(とても美人でいらっしゃるらしい)」
「箏の琴上手にて、故宮の明け暮れ遊びならはしたまひければ(十三弦が上手で、故宮が毎日稽古をつけていらっしゃったとか)」

など、口々言ふ(などと口々に言います)。

宰相の中将(源の宰相中将が)、

「いつぞやも花の盛りに一目見し、木のもとさへや秋は寂しき」(和歌 47-16)

「花の盛りに見た木立、寂しい秋にどう暮らす」(意訳 47-16)

*注に＜宰相中将の詠歌。「木のもと」に「子（姫君たち）」を響かせる。＞とある。「木のもと」は「このもと」と読むらしい。「いつぞやも」は「去年の春も」。「花の盛りに」は＜桜の満開の時に＞。その桜の「木の許＝木が植わっている山荘の庭」さえも「秋は寂しき」、という歌筋は今の初冬の情景そのままではありそうだ。となると、「一目見し」に万感の思いが託されていて、「さへや」の問い掛けは、盛りに見えた姫の事情までも秋になると衰えるのでしょう

か、と言っているように見える。が、それでは寂しさが確定されてしまって、逃げ場の無い本当に気が利かない歌詠みになってしまう。むしろ、初冬を迎えて厳しさが増す宇治ですが、春に盛りに見えた姫は今はどうしているのでしょう、と軽く話題を振ったと見ないと、あまりに源中将が無粋だ。

*主人方と思ひて言へば(薫君を宇治山荘の援助者で事情通と思ってこう問い掛けると)、中納言(薫中納言はこう応じます)、 *「あるじがた」は注に＜宰相中将が薫のこの姫君たちの主人側と思って読み掛けてくるので、の意。＞とある。

「桜こそ思ひ知らすれ、咲き匂ふ花も紅葉も常ならぬ世を」(和歌 47-17)

「盛りと咲いて散る桜、無常で続くこの世界」(意訳 47-17)

*注に＜薫の唱和歌。この世の無常を詠む。「花」「寂し」からの連想。＞とある。「知らす」の「す」は使役で＜知らせる＞。「知らすれ」の已然形は接続助詞「ば」を含意して、順接の説明項として下句を説得する。

衛門督(ゑもんのかみ)、

「いづこより秋は行きけむ山里の、紅葉の蔭は過ぎ憂きものを」(和歌 47-18)

「いつの間に紅葉の山に秋は行く」(意訳 47-18)

*注に＜衛門督の唱和歌。転じて、「紅葉」の美しさから、この場を去りがたい気持ちを詠む。＞とある。「いづこより秋は行きけむ」は＜何処から秋は去ったのか＞だろうか。何処から逃げ去ったのか、みたいな喪失感がある言い方に聞こえる。が、だとしても、この 5・7 部を一般化した言い方の上句として独立しているとは見做し難い。と言うのも、秋は季節の概念であり、何処か特定の所に出現する特異事象ではないので、その去就の差異を言えるとすれば、特定の場所ごとでの早い遅いの違いだけであり、であれば、是は「山里」だけに的を絞って、其処での秋の去就が全般的な傾向に比して早いか遅いかを述べたものでなければ意味を成さない。即ち、「いづこより秋は行きけむ」は「山里」の枕詞ないし副詞として語用されている。「紅葉の蔭は過ぎ憂きものを」は＜こんなに見事な紅葉の下は去り難いのに＞ということらしい。

宮の大夫(みやのだいぶ)、

「見し人もなき山里の岩垣に、心長くも這へる葛かな」(和歌 47-19)

「岩山と知るや知らずや伝う葛」(意訳 47-19)

*注に＜中宮大夫の唱和歌。『河海抄』は「奥山のいはがき紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて」(古今集秋下、二八二、藤原関雄)。『花鳥余情』は「見し人も忘れのみゆくふる里に心長くも来たる春かな」(後拾遺集雑三、一〇三四、藤原義懐)を指摘。＞とある。「いはがき」はざっと＜屏風岩の岸壁＞だろうが、宇治山荘は崖に建っている立地ではないので、それほどに厳しく寂しく見えるという比喩なのだろう。「見し人」は、この中宮職長官がかつて＜会った事がある人＝故八宮＞であり、宇治姫を＜愛した人＝故八宮＞である。「心長し」は＜変わらぬ心＞であり＜呑気さ＞である。「葛(くず)」は＜まめ科のつる草。山野に自生し、特にがけや斜面などに一面に繁茂する。根からでんぷんを取る。葉裏は白く、秋季風にひるがえって白い裏が波を立てるのが印象的である。「裏見」から「恨

み」をかけて縁語とする。秋の七草の一つ。＞と古語辞典にある。成功した遺伝情報を持つ植物品種らしく、生命力・繁殖力が強く、ヒトにとっても有用であったり、邪魔になったりと、なかなかに興味深く、情緒深くもあるようだ。葛の強さを見て人の脆さを思う、みたいな。

中に*老いしらひて（この座中では大夫が老人であって）、うち泣きたまふ（涙もろくいらっしゃいます）。親王の若くおはしける世のことなど（八宮が若くいらっしゃった時のことなどが）、思ひ出づるなめり（思い出されていたのでしょう）。　*「老い痴る（おいしる）」は＜老い衰える＞。

宮（匂の宮は）、

「秋はてて寂しさまさる木のもとを、吹きな過ぐしそ峰の松風」（和歌 47-20）

「紅葉を吹き散らし行く山下ろし」（意訳 47-20）

*注に＜匂宮の唱和歌。「木」に「子」を懸ける。＞とある。「木の下」を「子の許」に掛ける、という一音捻りは、「木」の一字を「こ」と発音する事自体が馴染まない所為か、私にはどうにも気分が乗らない詠み方だが、匂宮があえて源中将に被せるのだから、それなりに情感の込もった言い回しなんだろうな。

とて（と唱和して）、いといたく涙ぐみたまへるを（とても痛々しく涙ぐみなさるのを）、ほのかに知る人は（うすうす事情を知る人は）、

「げに、深く思すなりけり（やはり深くお思いのようだ）。今日のたよりを過ぐしたまふ心苦しさ（このように迎えの者に追い立てられては、今日の機会を会えずに逃しなさるお気の毒さ）」

と見たてまつる人あれど（と思い遣り申し上げる人も居たが）、ことことしく引き続きて（大行列を従えて）、えおはしまし寄らず（山荘にお立ち寄りなさることは出来ません）。

*作りける文のおもしろき所々うち誦じ（韻を踏んだ漢詩文の面白い文句を朗誦し）、大和歌もことにつけて多かれど（和歌も多く詠まれたが）、かうやうの酔ひの紛れに（こうした宴席での座興は）、*ましてはかばかしきことあらむやは（その場限りの楽しみです）。片端書きとどめてだに見苦しくなむ（上の五首を書き留めたのでさえ気が引けます）。　*「つくりけるふみ」は＜韻を読まれた漢詩文＞。　*「ましてはかばかしきことあらむやは」は＜然したる佳作もありません＞という言い方に聞こえる。が、公卿相手にそんな高所からものが言えるのは帝くらいだ。いや、帝は体面を重んじるから軽口は、少なくも公には言わない。つまり、是は女房の揶揄口調の軽口だ。男が勝手に遊んでいても、そんなものは大したことはない、という門外漢の負け惜しみだから許されるのだろうし、其処にどんな意味を込めた所で泡と消え去る空しさもまた事実であってみれば、当の男たちも、引いて醒めて見れば苦笑いせざるを得ない。人の情熱は価値概念における情報処理に過ぎないので、いつでも果敢無い。が、その情熱に人はいつも突き動かされる。そして時代が動く。

［第三段　大君と中の君の思い］

かしこには（山荘の方では）、過ぎたまひぬるけはひを（匂宮一行が去って行きなさった気配を）、遠くなるまで聞こゆる前駆の声々（遠く離れるまで聞こえる人払いの掛け声から聞き知って）、た

だならずおぼえたまふ(平然としていられないお気持ちになります)。心まうけしつる人びとも、いと口惜しと思へり(三の宮のご来訪を心積もりしていた女房たちも実に残念に思います)。

姫宮は、まして(姉君はますます)、

「なほ、音に聞く*月草の色なる御心なりけり(やはり噂通りの移り気な御方だったのだ)。　*「月草の色なる御心なりけり」は注に＜以下「人笑へにをこがましきこと」まで、大君の心中。「御心」は匂宮の心。『源氏釈』は「いで人は言のみぞよき月草の移し心は色ことにして」（古今集恋四、七一一、読人しらず）を指摘。「月草」は移ろいやすい心を譬える。＞とある。「月草の色」は月草の花が色移りしやすいことから＜心変わりな多情性＞をいうらしい。

ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、虚言をこそいとよくすなれ(それとなく女房たちの話を聞けば男というものは能く嘘を吐くらしい)。思はぬ人を思ふ顔にとりなす言の葉多かるものと(本気でもない相手に本気であるような顔をして言い寄るのだと)、この人数ならぬ女ばらの、昔物語に言ふを(此処の訳知りでも無さそうな田舎者たちが昔話のように話すのを)、

さるなほなほしきなかにこそは、けしからぬ心あるもまじるらめ(そのような卑しい者の中には不心得も居るだろうが)、何ごとも筋ことなる際になりぬれば(とにかく格別な尊い皇子であれば)、人の聞き思ふことつつましく(人聞きの悪い真似は出来ず)、所狭かるべきものと思ひしは(窮屈に真面目腐っているものと思っていたのは)、さしもあるまじきわざなりけり(そうでもなかったようだ)。

あだめきたまへるやうに、故宮も聞き伝へたまひて(三の宮は多情な人でいらっしゃると亡き父宮も伝え聞きなさって)、かやうに気近きほどまでは(私たちにお手紙の返事を書かせなさっても、このような親しい関係になるとは)、思し寄らざりしものを(お考えではなかったものを)。

あやしきまで心深げにのたまひわたり(三の宮は不思議なほど熱心に、こんな山暮らしの私たちに言い寄り続けなさり)、思ひの外に見たてまつるにつけてさへ(存外の御厚情と妹との婚儀を喜び申し上げるのさえ)、身の憂さを思ひ添ふるが(結局は軽々しい戯れごとであってみれば、妹共々この身の情けない立場を改めて思い知らされるのが)、あぢきなくもあるかな(本当に遣り切れない)。

かく見劣りする御心を(このような期待はずれの三の宮の御心を)、かつはかの中納言も、いかに思ひたまふらむ(是を仕向けたもう一方の当事者である中納言はどう思っていらっしゃるのだろう)。ここにもことに恥づかしげなる人はうち混じらねど(この山里にも特に気兼ねされる者は居ないものの)、おのおの思ふらむが(それぞれが内心で思うであろうことは)、人笑へにをこがましきこと(物笑いで情けない)」

と思ひ乱れたまふに(と思い落着きを失くされて)、心地も違ひて(気分を悪くされ)、いと悩ましくおぼえたまふ(体調も崩しなさいます)。

正身は(妹君ご本人は)、たまさかに対面したまふ時(数少なくも対面なさった時に)、限りなく深きことを*頼め契りたまひつれば(限りなく深い愛情を信じるようにと三の宮が誓いなさったので)、さりとも(今回はこのようにお帰りになっても)、こよなうは思し変らじと(そのお気持ちは変わらないだろうと)、「おぼつかなきも、わりなき障りこそは、ものしたまふらめ(御見えにならないのも止むを得ないご事情がおありなのだ)」と、心のうちに思ひ慰めたまふかたあり(と内心で思い慰めなさる面もありました)。　*「頼め」はマ行下二段活用の「頼む(頼らせる、信じさせる)」の連用形、のようだ。四段活用の命令形と見ても意味は通るかも。

ほど経にけるが思ひ焦れられたまはぬにしもあらぬに(三の宮の不参が久しくなったのを妹君が思い焦がれなさらない筈はないので)、なかなかにてうち過ぎたまひぬるを(なまじ近くまで紅葉見物に来て素通りなさったのを)、つらくも口惜しくも思ほゆるに(辛くも悔しくも思われて)、いとどものあはれなり(いっそう物悲しく)、忍びがたき御けしきなるを(耐え難いご様子なのを)、

「人なみなみにもてなして(其相応の皇女として振る舞い)、例の人めきたる住まひならば(都人らしい暮らしぶりなら)、かうやうに、もてなしたまふまじきを(三の宮もこのように冷淡には応対なさらないだろうに)」

など、姉宮は、いとどしくあはれと見たてまつりたまふ(などと姉君はいよいよもって妹君を不憫に思い申しなさいます)。

[第四段　大君の思い]

「*我も世にながらへば(私も長生きして世情に馴染めば)、かうやうなること見つべきにこそはあめれ(妹のような目に遭う事になるのだろう)。　*「我も世にながらへば」は＜私も長生きすれば＞で、姉君が大病を患っているという話は出て来ていないので、厭に思い込みの強い唐突な言い方に聞こえるが、実際に体調を崩しているらしく、その弱気な状態での思い、というように読むべきものらしい。ただ、行き成り＜私も長生きすれば＞という言い方は、文脈からしてやはり唐突なので、「世に永らふ」を＜世情に長く馴染む＞の語感にも取っておきたい。

中納言の、とざまかうざまに言ひありきたまふも(中納言がいろいろ言い寄って来なさるのも)、*人の心を見むとなりけり(人の気持を試そうという事なのだ)。　*「人の心を見むとなりけり」は注に＜「人」はわたし大君をさす。過去の助動詞「けり」詠嘆の意。今初めて気がついたというニュアンス。『完訳』は「薫はこちらの気を引いて反応を試すつもりだったのだと忖度」と注す。＞とある。ただ、「今初めて気がついた」は曲解だろう。「けり」は認識の再確認を示しているのだろう。男が女の家に通うという格式を前提に、男が女に会いたいと申し込むのは、それまでの手紙や歌の応答から女を娶りたいと結婚を申し込んだのであり、具体的には女の方で二人きりになれる部屋を用意して貰い、其処で情交したいと言っている事になる。その男の申し込みに応じて、女が二人きりになれる部屋を用意したということは、結婚を受諾したことになり、その夜に情事が無ければ変だ。が、薫中納言は姫を抱かなかった。姫は当惑する。姫は情事の作法も含めて、薫君に全てを任せていたので、抱かれない、という事自体をどう受け止めて良いのか分からない。薫君は、自分は意思表示しているのだから、後は姫の方から腕に飛び込んできて欲しいと言っていて、姫がその気になるまでは静かに話相手を務めたいなどと寝言を言っている。こういう優柔不断な面倒な男には、もう可愛い弟と割り切って女の方から仕掛けて遣れば良さそ

うなもんだが、この姫は薫君に負けず劣らず面倒な女で、とてもそんな態度が取れるような場数を踏んでいない。いやしかし、絶対に薫君が悪い。姫の山暮らしは分かり切っているのだから、其処で自分の複雑な事情を持ち出して、女の積極性を頼りたい、などと言うくらいなら、初めから交際を申し込むべきではない。姫は混乱した挙句に、自分で不足ならと妹を差し向けた。が、薫君は妹にも手を出さない。もう後は、中納言は女の気持ちを玩んでいるだけだ、と結論付けるしか無くなった。が、是は決して、今気付いた、のではない。二人きりの夜に抱いて来ない、という最初から、姫は薫君にその疑いを持って、非常に傷付いていたが、其処までの悪意は信じたくなかった。が、今や、三の宮と結ばれた妹が夜離れに遭っている事実を前に、自分たちの没落王家という惨めな立場を改めて思い知った、ということだろう。三の宮が妹に誠意を持っていたとしても、没落王家ゆえにこうした目に遭っているという事実認識は、残念ながら当たっていそうだ。

心一つにもて離れて思ふとも(しかし自分ひとりで中納言殿を遠ざけようと思っても)、こしらへやる限りこそあれ(取り繕うのには限度があって)、*ある人の*こりずまに(此処に居る女房たちが王家の誇りも顧みず実力者の庇護を頼んで)、かかる筋のことをのみ(結婚話ばかりを)、いかでと*思ひためれば(どうにか実らせようと思っているようなので)、心より外に(私の意に反して)、つひにもてなされぬべかめり(結局は結婚する事になってしまいそうだ)。　*「ある人の」は注に＜ここに仕えている者が。＞とある。「或る」ではなく「在る」ということらしいが、確かに、注が必要なほど分かり難い。　*「こりずまに」は＜性懲りもなく＝反省もなく＞だが、王家の自尊心など女房たちには初めから無い。現実を見据えて、実力者の庇護に与る事の尊さを、身を以て知っている女たちなのだろう。姉姫の言い方としては＜凝りもせず＞で良いとは思うが、発言文ではないので言い回しよりは文意を尊重し、事柄の中身を補語して、この言い方の客観的な意味合いを押さえて置きたい。　*「思ひためり」は「思ひたるめり」の音便。

これこそは(この事が)、返す返す(故宮が何度も)、さる心して世を過ぐせ(独身を覚悟して一生を過ごせ)、とのたまひおきしは(と仰せ置きなさったことの)、かかることもやあらむの*諌めなりけり(こういうことも在るかも知れないという戒めだったのだ)。　*「諌めなりけり」は注に＜過去の助動詞「けり」詠嘆の意。今初めて気がついたというニュアンス。＞とあり、その意を汲んで訳文も＜忠告だったのだわ＞としてある。が、この「けり」も再確認だろう。ただ、「かかることもやあらむ」と認識された今回の三の宮の不参は、確かに予想を超えた悲惨な事態で、驚くべき事柄ではあったようだし、その事を受けて惨めな立場を再確認したので、其処までは思い至らなかったという意外性はある。が、それは程度の悪さの認識であり、軽んじられるという方向性自体は、宇治姫たちは以前から用心していたものだ。即ち、三の宮の足が遠のくことまでは、物理的な遠さもあって何とか納得も出来るものの、対岸まで紅葉見物に来ていながら素通りした今回の非礼は許し難く思えたのだろう。それも、三の宮の屹立を目の当たりにして情熱を実感した妹君とは違って、姉君は自尊心が傷付くという概念だけが膨らむという始末の悪さだ。このことは中納言にしてみれば、三の宮が微行していたのでは、いつまでも宇治姫が日陰者なので、此処は一つ公然と紅葉見物に託けて宇治を訪ねて、宇治姫との仲を既成事実化しようと目論んだのだろうが、その皇子一行の威勢の良さと、それにも関わらず不参に終わった、という結果は宇治姫ばかりか三の宮まで苦しめることとなり、完全に裏目に出た形だ。

さもこそは、憂き身どもにて(私たち姉妹はそんな風な不幸な身の上同士なので)、*さるべき人にも後れたてまつらめ(夫にも先立たれ申すだろうから)、*やうのものと人笑へなることを添ふるありさまにて(自分まで結婚して、妹同様に物笑いになる姿を重ねた生き方で)、亡き御影をさへ悩ましたてまつらむがいみじさなるを(尊い両親の尊厳を損なわせ申すのが無念なので)、我だに、さるもの思ひに沈まず(せめて自分だけでも世俗に塗れず)、罪などいと深からぬさきに、

いかで亡くなりなむ(罪がひどく深くなる前に、どうか死んでしまいたい)」　*「さるべき人」は＜結ばれる運命の人＝夫＞。「後れたてまつらめ」の「め」は未来推量の助動詞「む」の已然形で、条件項提示の構文を成しているので、此処で句点は打たず読点で下文に続く。なお、その下文は順接の文意なので、接続助詞「ば」を内包すると見做せる。　*「やうのもの」は＜同様の者＝妹と同様＞。

と思し沈むに(と姉君は思い沈みなさると)、心地もまことに苦しければ(体調も実に悪いので)、物もつゆばかり参らず(何も召し上がらず)、ただ、亡からむ後のあらましごとを(ただ自分の死後にこの山荘がどうなるかを)、明け暮れ思ひ続けたまふにも(一日中思い続けなさると)、心細くて(心細くなるばかりで)、この君を見たてまつりたまふも(妹君のことをお考えになると)、いと心苦しく(先立つに忍びなく)、

「我にさへ後れたまひて(私にまで死に別れなさったら)、いかにいみじく慰む方なからむ(どんなに切なく寂しくなることだろう)。あたらしくをかしきさまを(可愛く美しい妹を)、明け暮れの見物にて(日々見る事が励みで)、いかで人びとしくも見なしたてまつらむ(何とか人並みに成って頂きたい)、と思ひ扱ふをこそ(と思って御世話するのを)、人知れぬ行く先の頼みにも*思ひつれ(内心で将来を楽しみに思っていたのに)、*限りなき人にものしたまふとも(高貴な人に添い遂げなさっても)、かばかり人笑へなる目を見てむ人の(このような物笑いになるような目に遭いながら妹が)、世の中に立ちまじり(中央の社交界に加わって)、例の人ざまにて経たまはむは(都人のように暮らしなさるのは)、たぐひすくなく心憂からむ(例えようも無く辛いことだろう)」　*「思ひつれ」の已然形は逆接で下に続く。　*「限りなき人」は匂三の宮。

など思し続くるに(など思い続けなさると)、「いふかひもなく(私たちは、どう言っても救いようも無く)、この世にはいささか思ひ慰む方なくて(この世では何も報われずに)、過ぎぬべき身どもなりけり(暮らすしかない姉妹のようだ)」と心細く思す(と気弱に考えなさいます)。

[第五段　匂宮の禁足、薫の後悔]

宮は(三の宮は)、立ち返り(折り返し)、例のやうに忍びてと*出で立ちたまひけるを(いつものように隠れて宇治へ出掛けなさろうと支度をなさっていらっしゃったが)、*内裏に(うちに、せっかく連れ戻し申したというのに再外出なさろうとは、とつい内々の陰口で)、　*「出で立ちたまひける」は注に＜出立なさろうとしたが。出立していない。＞とある。全体の文意としては、私には非常に分かり難い言い回しで書かれていて悩ましいが、下に「漏らし申したまひければ」と事前密告(をしたのではなく、結果としてそうなってしまった)があったようなので、どうもそうらしい。ただ、「出で立つ」を＜出発する＞と読んだのでは「たまひける」は＜なさってしまった＞という言い方になるだろう。だから、「忍びてと」の「と」が利いていて、この「出で立つ」は＜意を決する→支度をする＞で、その事から匂宮の外出を察知した衛門督が、密告と言うよりは、折角自分が迎えに行って引き戻しても宮に綱は付けられないからな、と中宮付きの女房にでも愚痴った、と書いてあるように思う。しかし、苛立つほど分かり難い文だ。　*「内裏に」は「うちに」と読みがあるが、むしろ是は正しい漢字表記なのだろうか。「内裏に」と書けば＜帝に＞であり、是は注記もあるが、帝には＜奏す＞のであって「申す」は有り得ない。ウエブの京都大学本の写本画像(p160)、保坂本画像(88/133)、を見る限りは「うちに」と平仮名表記であって、「内に」であれば＜内々に＞とか＜その最中に＞または＜陰口で＞という言い方であり、それが下文の「衛門督の漏らし申したまひければ」に符合するので、そう取りたい。というか、衛門督の発言は奏上どころか、報告でも無い

わけで、この「内裏に」という漢字表記は「出で立つ」の分かり難さに加えて、更に文意を混乱させる誤字なのではないか。であれば、相当に罪深い。

「かかる御忍びごとにより(こうした御忍びがあるので)、山里の御ありきも(山里の紅葉見物も)、ゆくりかに思し立つなりけり(呑気に思い立ちなさるのだろう)。軽々しき御ありさまと(皇子にあるまじき軽々しい為さりようと)、世人も下にそしり申すなり(世間でも蔭で悪く言うようだな)」

と、衛門督の*漏らし申したまひければ(と衛門督が女房に愚痴を洩らしなさったので)、中宮も聞こし召し嘆き(中宮も匂宮の再外出をお知りになって嘆き)、主上もいとど許さぬ御けしきにて(帝もいよいよ放任できないご意向で)、　*「漏らし申す」は<愚痴を洩らす>だ。中宮の命で、せっかく自分が三の宮を連れ戻しに出かけても、本人に反省が無いのでは無駄骨だ、という無力感なのだろう。いや、男として匂宮に共感してのも苦笑いというのも有り得る。匂宮は皇子であり叔父でもあるが、衛門督よりは6歳以上は年上だろうし、小さい時は長兄として遊んで遣っていたのかも知れない。注には<『集成』は「「もらし申し--」とあるので、衛門の督は取次ぎの女房にそれとなく言ったのであろう」と注す。>とある。

「おほかた心にまかせたまへる御里住みの悪しきなり(そもそも気ままな実家住まいが悪いのだ)」

と、厳しきことども出で来て(と制約が加えられて)、*内裏につとさぶらはせたてまつりたまふ(中宮は三の宮を御所にずっと留め置き申しなさります)。　*「内裏につとさぶらはせたてまつりたまふ」の目的語は匂宮だろうが、主語は帝か中宮か。「みけしき」は帝の意向だが、それを引いて語っているように聞こえるので、実際に指図したのは中宮なのだろう。

*左の大臣殿の六の君を(左大臣の源氏殿の六姫を)、うけひかず思したることなれど(匂宮は娶らない御心算だったが)、おしたちて参らせたまふべく(否応も無く結婚させなさるように)、皆定めらる(婚儀万端が取り運ばれました)。　*「左の大臣殿」は「ひだりのおほいどの」と読みがある。であれば、漢字表記は「左の大殿」になりそうなもんだが、写本にこう表記されているのだろうか。今は追わない。

中納言殿聞きたまひて、あいなくものを思ひありきたまふ(中納言殿はこの事の運びをお聞きになって打開策も無く今までのことを振り返りなさいます)。

「わがあまり異様なるぞや(私があまりに常識外れだったのだろうか)、　*やっと薫君の反省の弁が聞けて、自分の過ちに気付いたのかと思いきや、それは決して宇治姉妹の立場を理解してのものではなく、それどころか、自分の偏屈さを引いて見るでもなく、いわんや皇子の立場を臣下として護る高官の自覚や、帝や中宮の意向を奉る姿勢も無く、ただ親交の在る近親者として三の宮や宇治姫の期待に出来るだけ本音で応えようとしたあまりに上手く立ち回り損ねた、くらいの後悔らしい。いや、そうでなければ中途半端で、この薫君の見上げた独り善がりは、如何にも高家の、それも最強の高家の、実務責任は兄の源殿が負い、中宮の弟であるという揺るぎない権威を纏った、底抜けの好漢ぶりは、正に王朝を体現していて実に晴れ晴れしい。だから直後に、この反省を打消す言い訳が続く。「や」は疑問ではなく反語の係助詞。

さるべき契りやありけむ(いや、そういう宿縁であったに違いない)。*親王のうしろめたしと思したりしさまも、あはれに忘れがたく(故八宮が姫君たちの行く末を案じていらっしゃったのも印象深く忘れ難く)、この君たちの御ありさまけはひも、ことなることなくて世に衰へたまはむことの、惜しくもおぼゆるあまりに(姫君たちの御姿形も独身で一生を終えなさるのが惜しく思えたあまりに)、人びとしくもてなさばやと、あやしきまで*もて扱はるるに(王女らしくして差し上げたいと、他人にしては変なほどに親しく御世話申せずにはいられなかったが)、宮もあやにくにとりもちて責めたまひしかば(匂宮も無闇に姫に取持つようにせがみなさったので)、わが思ふ方は異なるに、*譲らるるありさまもあいなくて(私の気持ちとは違って、姉君から妹君を譲られた事情も不本意だったことから)、かくもてなしてしを(妹君を三の宮に宛がい申すように取り計らったというのに)。　*「みこ」は注に＜故宇治八宮をさす。＞とある。匂宮も＜親王＞なので、確かに紛らわしい。　*「もて扱はるる」は、「もてあつかふ(御世話申す)」の未然形「持て扱は」＋自発の助動詞「る」の連体形、で＜御世話せずには居られなかった事情＞。　*「ゆずらるる」の「る」は受身の助動詞。「譲らるるありさま」は＜姉君から妹君を譲られた事情＞なのだろう。

思へば、悔しくもありけるかな(思えば惜しいことだった)。いづれもわがものにて見たてまつらむに(どちらの姫も私の女にして御世話申すのに)、咎むべき人もなしかし(非難する人も無かったものを)」

と、取り返すものならねど(と取り返しの付かない事ながら)、をこがましく(失敗したと)、心一つに思ひ乱れたまふ(内心で思い乱れなさいます)。

宮は、まして、御心にかからぬ折なく、恋しくうしろめたしと思す(匂宮はますます宇治姫が心から離れず恋しく心配なさいます)。

「御心につきて思す人あらば(お気に入りの女が居るなら)、ここに参らせて(此処に宮仕えさせて)、*例ざまにのどやかにもてなしたまへ(普通の召し人のように気安くお相手なさい)。*筋ことに思ひきこえたまへるに(上様はあなたのことを格別に遇したいと思い申していらっしゃるのだから)、軽びたるやうに人の聞こゆべかめるも(軽々しい人のように世の人が噂するようなのは)、いとなむ口惜しき(本当に情けない)」　*「れいざまに」は注に＜召人、すなわち愛人関係をさす。＞とある。　*「すじことにおもひきこえたまへる」は注に＜主語は帝。匂宮を将来東宮にとのお考え。＞とある。

と、大宮は明け暮れ聞こえたまふ(と母中宮は三の宮にいつもお話し申しなさいます)。

[第六段　時雨降る日、匂宮宇治の中の君を思う]

時雨いたくしてのどやかなる日(時雨が降り続いて来客も無く閑な日に)、女一の宮の御方に参りたまひつれば(三の宮が女一の宮の御部屋に参上なさると)、御前に人多くもさぶらはず(御簾内には女房も多く控えておらず)、しめやかに、御絵など御覧ずるほどなり(物静かに御絵など御覧になっているところでした)。

御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ(御几帳で顔を合わすのは遠慮して、お話し合い為さいます)。限りもなくあてに気高きものから(最上に品があり格調ある物腰ながら)、なよびか

にをかしき御けはひを(雅で優しい雰囲気の姉宮を)、年ごろ二つなきものに思ひきこえたまひて(匂宮は年来またとない尊い人と思い申しなさって)、「また、この御ありさまになずらふ人世にありなむや(他にこの人に準え得る人がこの世に居るだろうか、というほどです)」、

冷泉院の姫宮ばかりこそ、御おぼえのほど、うちうちの御けはひも心にくく聞こゆれど(冷泉院の姫宮だけは御興味があって、内輪での御評判も上々と聞くものの)、うち出でむ方もなく思しわたるに(結婚の申し込みもせずに思い続けていらっしゃったが)、「かの山里人は(あの宇治姫は)、らうたげにあてなる方の(可愛く上品な点は)、劣りきこゆまじきぞかし(高貴な姉宮に劣り申すまい)」

など、まづ思ひ出づるに(などと直ぐに宇治姫が思い出されて)、いとど恋しくて、慰めに(ますます恋しくなって気休めに)、御絵どものあまた散りたるを見たまへば(たくさん散らかっている絵の数々を御覧になると)、をかしげなる女絵どもの(恋物語の女好みの絵で)、恋する男の住まひなど描きまぜ(恋人の男の住まいなどが描いてあって)、山里のをかしき家居など(山里の風情在る家の様子など)、心々に世のありさま描きたるを(それぞれに事情のある男女の姿が描かれてあるのを)、よそへらるること多くて(同情できることが多くて)、御目とまりたまへば、すこし聞こえたまひて(匂宮は目が留まりなさって、姉宮に何枚かお譲り頂くべく相談申しなさって)、「かしこへたてまつらむ(宇治姫に差し上げたい)」と思す(とお思いになります)。

*在五が物語を描きて(伊勢物語が描かれていて)、妹に*琴教へたる所の(男が妹に琴を教える場面で)、「*人の結ばむ(この若草を誰が寝るのか)」と言ひたるを見て(と言っている絵詞があるのを見て)、いかが思すらむ(姉宮は是をどう御覧になるのだろう)、すこし近く参り寄りたまひて(と匂宮は少し姉宮に近寄りなさって)、　*「在五が物語(ざいごがものがたり)」は＜在五中将（在原業平）を主人公とする物語の意、「伊勢物語」の異名。＞と大辞林にある。「在原業平(ありはらのなりひら)」は＜［825～880］平安前期の歌人。六歌仙・三十六歌仙の一人。阿保親王の第5子。情熱的で詠嘆の強い和歌を残し、伊勢物語の主人公とされる。美男子の代表といわれる。在五中将。＞と大辞泉にある。　*「琴」は「きん」と読みがある。「きん」は七弦古琴で、六弦和琴や十三弦の箏と違って専ら私的な独奏楽器とのことで、此処で「きん」がどれほどの意味合いを持って語られているのかは、私などが知る由もないが、「きん」をたしなむ事自体が、男なら相当な教養の高い家柄を思わせるし、女なら王家に嫁ぐ、または妃として入内する、ということを示しているのかも知れない。　*「人の結ばむ」は注に＜「うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」という『伊勢物語』四十九段中の男の歌。＞とある。今に伝わる「伊勢物語49段」には、男が「妹に琴教へたる所」に付いては無いものが多いようだが、此処に在る絵ではそのような場面として描かれているらしい。ところで、此処の部分の話は、伊勢物語49段を丸々下敷きにした小話になっているようで、当時の読者には常識であったらしい伊勢物語49段を、此処で見直して置かないと、私には頓と文意が覚束無い。幸い幾つかの大学図書館ウエブ・サイトに写本画像がアップされているが、私には正しい原文らしきものは読み取れない。掻い摘んだ説明が欲しいので、「花川みつのり」という人のウエブサイト他を参照して、原文らしきものに当たりを付ける。で、その原文らしきものは短文なので全文を再転用掲載する。即ち伊勢物語49段は、≪むかし、をとこ、いもうとのいとをかしげなりけるを、みをりて、『うらわかみ　ねよげにみゆる　わかくさを　ひとのむすばむ　ことをしぞおもふ』、ときこえけり。かへし、『はつくさの　などめずらしき　ことのはぞ　うらなくものを　おもひけるかな』≫、とのこと。幾つかの関連サイトを参考に現代語文を試みると、ざっと≪ある日、ある男が、妹がとても美しくなっていたのを、見ていて、『うら若くて寝心地が良さそうに見える若草を誰が抱くのか気になるな』と申しました。妹の返歌は『初めての言い種が何か珍

しい言葉なので、私には意味が分かりません』≫、あたりの筋立てだろうか。この妹は腹違いで、母親が王家筋なのか、男より身分が高いらしい。ちょっと色っぽくて微笑ましい春の一場面のようにも見えるが、逆に言えば、ただそれだけのことのようでもあり、特に是を逸話に仕立てる意図が分からない。で、分からないながらも感じるのは、この和歌の贈答で語用される「うら」と「くさ」の多義性と、如何にもそれを踏まえたらしい各縁語の多用が愉快で、つまりはこの歌詠みの洒落の応酬こそが書き残す価値のあるものなのかも知れない、という推測だ。というか、これらの言葉をもう少し読み込まないと、この 49 段の話自体もフワッとした小話のままで食い足りない。というわけで、深みにはまる。さて、「うらわかし」は「うら若い」という現代語に引き継がれている。「うら若い」は＜潤いがあって瑞瑞しく若い＞という語感だが、専ら若い女を修辞する形容詞だ。で、この「うら」は「本・許・元」に対する＜裏＞で「末・こずえ・端」を意味し、その伸び行く＜瑞瑞しい生命力＞を示す接頭語というのが一説で、その意味で「(若)草」を縁付ける。また一説に、「うら」は＜見えない内面＝心＞で、「うら若し」は若く見えるだけでなく＜気が若い＝長無い＝幼い＝純情だ＞とも言っていて、「うら若み」の接尾語「み」が連用形の「うら若く」の＜なので＞という客観表現よりは、実感を伴った＜だから＞という説得力を持って「ことをしぞおもふ」に甘酸っぱさを漂わす。その他にも、「若草」だけに「ねよげにみゆる」は＜根が良さそうに思える＞であり、当然に＜寝心地が良さそうに見える＞との複意だ。そして、「寝」は＜共寝＝結婚＞で「ひとのむすはむ」に縁付く、という縁尽くし。更に返歌は、「(初)草」から「(言の)葉」を導き、「くさ」に「種」を掛ける。歌筋は、上句が＜初－珍－事件＞の軽口に「めづ(愛づ、楽しい)」気分を乗せる詠み方で、下句とは＜めづらし(目新しい工夫がある)－うらなし(迂闊に工夫がない)＞という対比構文の面白さがある上に、下句自体の言い回しも「うらなく」「おもふ」の＜考えずに考える＞という逆説の冗句に＜何となくよそ見している＞ことの物言わぬ思わせぶりを込めていて、戯れとも謎掛とも取れる奥深さを漂わしている。是は和歌でしか表現できない微妙な空気感だろうか。いや、こういう表現が他に在るか無いかは別として、此処に独特な雰囲気は在るような気がするし、やはりこの歌詠みに示された互いの気持ちの綾が、この話を書き留めた主題なのだろうと思う他は無い。もしかすると、この話が伝えられた当初は、皆が知る醜聞実相が背景に在っての面白い艶聞だったのかも知れないが、今となっては此処に残った文言の言葉遊びを見ることしか出来ない。とはいえ、それにしては私には斯様に多くの手間を要す。

「いにしへの人も(この絵を見ますと、昔の人も)、さるべきほどは(兄弟の仲では)、隔てなくこそならはしてはべりけれ(直に対面していたようですね)。いと疎々しくのみもてなさせたまふこそ(姉上は私を御几帳などの物越しでとても余所余所しく応対なさいますが)」

と、忍びて聞こえたまへば(と小声で申しなさると)、「いかなる絵にか(どんな絵かしら)」と思すに(と姉宮はお思いなので)、おし巻き寄せて、御前にさし入れたまへるを(匂宮は絵巻を手許に巻き寄せてから姉姫の御前に几帳の脇から差し入れなさると)、うつぶして御覧ずる御髪のうちなびきて(前かがみになって御覧になる姉宮の御髪が肩に引かれて)、こぼれ出でたるかたそばばかり(分け見えてきた横顔のほどを)、ほのかに見たてまつりたまへる(几帳の隙間から拝し申しなさると)、飽かずめでたく(見飽きること無く美しく)、「*すこしももの隔てたる人と思ひきこえましかば(少しでも遠縁の人と思い申せたら)」と思すに(と姉宮をお思いになると)、忍びがたくて(匂宮は抑え切れずに)、　*「すこしももの隔てたる人」は注に＜少しでも血の繋がりの遠い人、の意。＞とある。即ち、近親相姦の危うさを思わせる言い方なわけだ。作者には当然に読者の興味を引く意図はあるだろうが、それが強ちあざとくないとすれば、王家の尊い好色という価値観が底に在るのだろう。

「若草のね見むものとは思はねど、むすぼほれたる心地こそすれ」(和歌 47-21)

「若草も 知らぬ他人と 言うじゃなし」（意訳 47-21）

*注に＜匂宮から実の姉女一宮への贈歌。「若草」「根（寝）見む」は『伊勢物語』の作中歌を踏まえた表現。『完訳』は「姉弟だから共寝をとは思わぬが、悩ましく晴れやらぬ心地だと訴える。好色心躍如たる歌」と注す。＞とある。「むすぼほる」の発音は＜むすぼおる・むすぼーる＞で語意は「むすぼる」と同じらしい。「むすぼる」は＜結ばれる、縁故になる、草木が露を置く、固まりになる＞で、それが＜露を置く→泣いている→悲しそう＞とか＜固まりがある→胸の支えになる＞という言い方にもなるらしい。つまり「むすぼる」は「結ぶ」の受動形の言い方だろうが、「結ばる」の「ばる」が能動音感なので「ぼる」に訛ったのだろう。となると、「結ぼる」では「結ぶ」の未然形「結ば」の状態仮想感が損なわれるので、受動状態を示す為に受動の助動詞の「る」の方を未然形に代用して「結ぼれ」として、それに更に「る」を重ねて「結ぼれる」という語に落ち着かせるまでの過渡的な形が「結ぼほる」だった、と夢想するのも面白い。他にも受動状態を示す言い方が分かり難い語が有ったのか、自然に受動状態を示す言い方が「れる」に発達したのか、は分からないが、むしろ現代語では素直に「結ぶ」の未然形「結ば」に「れる」が付いて収まっている、ように見える。何れ、「むすぼほる」も「結ぶ」であれば、是も『伊勢物語』の作中歌に習った語用だ。即ち、当歌は丸々伊勢物語 49 段の男の歌「うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」を下敷きにしているわけだが、この引き歌が姉弟ないし兄妹で交わされていたという事情は伊勢物語 49 段全体を見なければ分からなかった。で、それは先に見たので、女一の宮は中宮の第二子だろうから 30 歳近い筈で、普通は「若草」に例えるのは不相応だが、伊勢物語 49 段の絵を見て「若草」と言えば、それが姉弟の姉を指す事は知れるので、この場面での匂宮と姉宮との遣り取りの意味も辿れるが、それにしても、こういう露骨な言い掛かりを行き成り姉宮に言えるのも、同音異語が多い日本語の紛らわしさが、同時に発想転換の豊かさを有して、同じ言い回しで別の意味の洒落が利いた冗句に出来るという仕掛けが有るからだ。で、当歌の表向きの歌筋は＜若草の根を見ようとは思わないが露を帯びた姿に悲しい定めを感じます＞で、是だけでも「すこしももの隔てたる人と思ひきこえましかば」を言い換えた艶な趣きはある。が、勿論、もっと露骨な複意が示されていて＜若草と寝てみようとは思わないが既に結ばれたような親しい実感はあります＞とまで言っている。実の姉弟だから冗談で済むが、実の姉弟だけに否定出来ない困った言い掛かりでもある。「結ぼほる」は＜わだかまりがある＞と多く訳されていて、そのようにも取れるのかもしれないが、「結ぼほれたる心地」の「たり」の状態提示意は＜そうなっている（気分）＞のように私には聞こえる。

御前なる人びとは（女一の宮付きの女房たちは）、この宮をばことに恥ぢきこえて（三の宮を特に気兼ね申して）、もののうしろに隠れたり（物陰に隠れていました）。「ことしもこそあれ（誰も聞いていないからといって、こともあろうに）、うたてあやし（何と下品な）」と思せば（と姉宮はお思いになって）、ものものたまはず（何も仰いません）。ことわりにて（姉宮が困惑して返歌なさらないのは尤もな事で）、「*うらなくものを（何のことか分からない）」と言ひたる姫君も（と惚けて応えた伊勢物語の姫君も）、*されて憎く思さる（世慣れ過ぎていて、匂宮には嫌味に思えなさいます）。　*「うらなくものを」は注に＜『源氏釈』は「初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな」（伊勢物語）を指摘。＞とある。伊勢物語 49 段の妹の返歌だ。この歌の「うらなし」は意味深で＜思惑など無い＞とも、逆に＜考えが足りない＞とも、「物思ひ」の多義性とも相俟って、思わせぶりとも謎掛とも取り得ることは先に見た。が、最も場面オチが着くのは＜分からない＞と妹が惚けたところで話が終わる、という落語形かと思う。そして、こういう際どい話に困惑もせずに、落ち着いて白を切る姫君を、匂宮が「されて憎し」と評することは、全体の価値観に整合性が取れて、此処の小話と伊勢物語が符合する。　*「さる」は＜野ざらしになる。古びる。＞で、転じて＜世慣れる。洒脱だ。風流だ。＞という言い方でもあるらしい。また、「思さる」の主語は匂宮で、一度文意を取ってしまえば迷うことはないが、この本文をざっと見た限りでは、女一の宮が主語に見えて、とても面倒な文に思えた。私がこの手の主語省略に馴れる事は、先ず無い。

*紫の上の、取り分きてこの二所をばならはしきこえたまひしかば(紫の上が特にこの御二人を親しく御育て申しなさったので)、あまたの御中に(数多い兄弟の中でも)、隔てなく思ひ交はしきこえたまへり(御二人は仲良く思い合い申していらっしゃいました)。　*「紫の上」という言い方は現代文風で私には分かり易いが、「故人」や「祖母」と言わないのが、この物語にしては異例に思う。尤も、血縁関係は無い立場上の縁故なので、他の呼び方が馴染まないのかもしれないが、妙に気になる。

世になくかしづききこえたまひて(祖母上は御二人をこの上なく大事に御育て申しなさって)、さぶらふ人びとも(御二人に側仕えする女房たちも)、*かたほにすこし飽かぬところあるは、はしたなげなり(何処か少しでも器量の劣る者は極まりが悪いほどの粒揃いです)。やむごとなき人の御女などもいと多かり(高家の令嬢もたくさん居ました)。　*「かたほ」は＜部分的な不備＞だが、「はしたなし」は誤りの咎めではなく本人の気が引ける劣等感で、「すこし飽かぬ(いくらか不十分)」は躾や教養よりも器量の悪さを言っているらしい。「まほ(真面)」に対する「かたほ(片面)」。

御心の移ろひやすきは(三の宮の移り気は)、めづらしき人びとに(そうした高家の令嬢の中の目に付く女たちに)、はかなく*語らひつきなどしたまひつつ(場当たりの情事を仕掛けなさりながら)、かのわたりを思し忘るる折なきものから(宇治姫を思い忘れることはないものの)、訪れたまはで日ごろ経ぬ(お訪ねのないまま日は過ぎました)。　*「語らひ」は＜話し合い＞であり、そうすることで＜親交を結ぶこと＞であり、男女においては＜情事する＞だ。